

会 報

T U W V O B 会 No. 50 2019. 12. 25

ホームページ <http://tuwwob.yamagomori.com/> (新しくなりました)

メールアドレスの変更は事務局（8期 佐藤）までご連絡ください。

OB会報は郵送を止め、原則としてTUWVOB会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は事務局までご連絡ください。taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp

部長就任挨拶

22期（昭和58年卒）土屋 範芳

本年（2019年）4月より、ワンダーフォーゲル部の部長を拝命した22期の土屋です（工学部卒、現在環境科学研究科）。

私が入部した昭和54年は、鈴木先生が部長で、その後、吉田先生、野家先生、植松先生と続き、私が5代目ということになります。学友会体育会系のクラブも、OBが必ずしも部長を担うことが少なくなる中で、TUWVはOBが部長を続けていることは大きな誇りでもあります。

私自身は、現役時代、沢登りに傾注し、夏合宿は、日高山脈、上越、また3年生の時も日高山脈の沢登りを楽しみました。現役当時は、クラブの有志で冬山登山も行われていました。4年生の最後に飯豊に挑戦し、卒業式前日の3月24日に下山し、ほほに凍傷を負ったまま、卒業式に出たことを今でも良く覚えています。自分自身の専門にも関係し、山登りの技術と気合いは、その後の研究者としてのキャリアに大きな助けとなりました。日本の南極観測隊員として南極に3度出かけております。その当時は山岳経験者が隊員に選考される例が多く、北大山岳部出身者などの猛者揃いでしたが、TUWVでの経験が大きく役立ったと思っています。現在は、プロの山岳ガイドがフィールド・アシスタンントにつく例が多く、観測隊員自身の山岳経験は必ずしも必要ありませんが、それでも極地での生活への耐性という点では、山の経験は重要です。現在、第61次南極観測隊として、セール・ロンダーネ山地の地学調査が行われていますが、隊員5名のうち2名が当方の研究室の助教と元ポスドクです。昨シーズンから、彼らと八幡平などの冬山で訓練を重ねてきました、私自身は、冬はバックカントリースキー、夏は今でも沢登りを続けており、最近は、東北の虎毛山塊の赤湯又沢、虎毛沢に2年越しで挑戦し、ようやっと完登いたしました。

また、本年は、1年生が17名入部（現在2名退部で15名在籍）するという快挙に恵まれました。訓練用のテントが足りないなど、うれしい悲鳴が上がり、急速、OB諸氏に寄附をお願いいたしました。私の同期、またその前後数期の有志は、LINEでつながっており、またe-mailアドレスも把握されていて、比較的容易にコミュニケーションがとれています。OB諸氏の浄財により、無事訓練合宿等が乗り切れて、夏合宿も充実したと聞いております（このOB会報にも記事があると思います）。

学生の部活動は、学生の自治と自由意思で運営されるのが基本であり、TUWVは、特にその伝統が強く、教員もまたOBも現役の活動の後方支援に徹しておりました。今後もこの伝統を継承しつつ、現役諸君の活動の支援を進めることができればと思います。今後ともご支援、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

なお、寄附をいただいたOB諸氏のお名前と寄附年月日を掲載いたします。寄附総額は49万円に達しております。大変ありがとうございました。

2019/5/10	フジワラ ヤスヒロ	2019/5/16	タテヤマ アキノリ
2019/5/10	イシカワ ツトム	2019/5/16	マルヤマ タカシ
2019/5/11	ホンゴウ アキヒト	2019/5/17	ワガ ショウ
2019/5/12	キクチ エイイチ	2019/5/17	カワグチ ヒロキ
2019/5/13	オオエ ジュン	2019/5/17	カサハラ マサキ
2019/5/13	コマツバラ タク	2019/5/17	オオツカ キンヤ
2019/5/13	スズキ ヒロアキ	2019/5/20	セキ エイイチ
2019/5/13	センダ トシユキ	2019/5/20	マツバヤシ タカシ
2019/5/13	イシイ アツシ	2019/5/20	カネコ セイジ
2019/5/13	オヤマ シゲノリ	2019/5/21	ナガサワ (35期)
2019/5/13	テヅカ カズヒコ	2019/5/22	イトウ ヨウスケ
2019/5/13	ハセガワ マサカズ	2019/5/23	アイハラ シロウ
2019/5/14	ウエキ タカシ	2019/5/23	ナンジョウ ヒロシ
2019/5/14	ササキ アキラ	2019/5/23	ヒラタ コウイチロウ
2019/5/14	ミヤザキ コウジ	2019/5/27	オオタケ ヒデオ
2019/5/14	モリタ ショウイチ	2019/6/27	サカモト ツトム
2019/5/15	オカザキ コエジ	2019/7/1	オオヤマ ユキノリ
2019/5/15	カワシマ ヨシユキ	2019/7/24	ウエダ トシロ

在仙OB会の活動と現役生の近況報告

29期（昭和65年卒）田原 誠

TUWVの新入部員は近年数名ずつと低迷していましたが、現2年生の時に6名（2019年春時点）と復活の兆しを見せていました。それが今年の春に16名入部（訓練合宿終了時で15名）と一緒に増えたため、訓練合宿のあり方などについて現役4年生の北村主将よりロープワーク講習等を通じて交流のあった8期佐藤拓哉さんに相談があり、在仙OBに支援を求めるなどをアドバイスされるとともにOB会費から支援金を拠出されたことがサポートの始まりでした。金銭面では部長の土屋先生を通じても多くの諸先輩方からも寄せられました。ご協力頂きました先輩方にはこの場をお借りして現役生に代わり改めて御礼申し上げます。

このような経緯により、今年の合宿等の活動をOB会がどのようにサポートしていくべきかを話し合うため、58期の星さんの呼び掛けで5月24日（金）に在仙OB・OG 10名が東洋軒本店に集まりました。

その場には北村主将も参加し議論した結果、彼らの方針と要望を尊重し、OBが訓練合宿や夏合宿に直接的に参加するのではなく、既に実施した装備・資金面の支援と緊急時のための後方支援に留めることになりました。そのため、在仙OBがより緊密に連携し情報共有できるように田原が事務局となって在仙OB名簿を再整備し、メール等で隨時現役生の活動を発信すると共に半期に一回は集まることにしました。

その結果、今年の夏合宿は久しぶりに3パーティ（北アルプス短期P・北アルプス長期P・知床P）が結成され、その内北アルプス長期Pと知床Pは2年生がPLを務めるという変則的な構成となりました。6月21日に開催された今年の前期総会に久しぶりに参加してみると、上級生の少なさに不安感を感じつつも自分たちの頃と変わらないノリに懐かしさを覚え、4年生2名の頑張りもあって無事プレ合宿を完了して8月初旬に夏合宿に出発して行きました。

本番では各パーティとも歓喜や失望を経験し、危うい場面もあったようですが何とか乗り越えて全パーティが無事下山しました。11月26日に開催された後期総会で報告する彼らの表情は、前期総会と比べて格段にいい顔になっており、反省点やこれからの抱負を語る姿は頼もしくもありました。

来年は現2年生の柳田君が主将となりTUWVを運営していくとのことで、引き続き一番近くにいる在仙OBとしてできることを模索しながら見守っていこうと思います。



5月24日在仙OB会
前列左より、長澤副部長（35期）、庄子さん（5期）、瀬尾さん（5期）、真尾さん（7期）、田原（29期）
後列左より、手戸さん（7期）、国岡さん（7期）、守護さん（8期）、渡辺さん（8期）、北村主将（4年）、星さん（58期）



6月21日 TUWV前期総会



8月10日 知床P出発（国際センター駅にて）

山梨の温泉で6期同期会

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

2019年7月に、山梨県甲州市勝沼ぶどうの丘にて同期会が開催された。男性12名、女性3名の参加であった。宵宮では、和室の食堂で山梨特産のワインと日本酒で乾杯、宴会場を引き上げても23時まで反省会。あまりの盛り上がりに隣室から苦情が来た。

翌日は、まだまだ馬力がある大菩薩峠登山組(江原さん、原田さん、駒村さん、西さん)の4名と、年齢相応の体力となった街中観察組の11名に分かれて出発した。街中組は、山梨県のぶどう発祥の地「ぶどうの寺 大善寺」を訪ねて、100段の石段を登って甲府盆地とカンゾウの花、菩提樹の実を眺めた。武田信玄公の恵林寺に移動して、武田信玄の墓、柳沢吉保の墓にお参りをし、信玄館で昼食をして解散になった。携帯で、登山組



の下山を確認した。

ちなみに、直近の同期会は、2009年長野県乗鞍岳、2011年宮城県松島、2014年新潟県銀山平、2016年長野県松代で野村彰夫君追悼会、2017年群馬県尾瀬であった。

TUWV 7期・岩手同期会記録

7期（昭和43年卒）矢後 素子

日時：2019年7月10-11日

所：岩手県松川温泉一泊・八幡平散策・盛岡観光

参加者：15名（石川誠之、上田俊朗、上田博子、大釜寛修、大山幸則、菊谷清、国岡徹郎、高橋直樹、手戸雅巳、原三郎、藤森英和、真尾征雄、村山貞一、矢後素子、山口正雄）

昨年11月半ば、仙台組3人（国岡さん、手戸さん、真尾さん）と幹事役の矢後が仙台駅近の居酒屋に集まり、「次期同期会は松川温泉一泊旅行」と決定した。以後、仙台組に加えて菊谷さんの援助もいただき、旅行会社に相談しながら計画を作成した。

今年6月から7月にかけて、全国的に雨降りの日が多い天候だったが、幸い、岩手は雨が少なく、良い天気の日が続いていた。7月10日、この日も太陽の光がまぶしいくらいに照っていた。遠くは北海道や長野から、あるいは首都圏、東北から三々五々、松川温泉に集結した（盛岡から路線バスにて約2時間、一日3本のみ）。早めのバスで来たグループは、松川地熱発電所（日本初の地熱発電所）のミニ資料館を見学した。宿は3軒あり、地熱発電所に一番近い峡雲荘に泊り、白い湯の温泉に癒され、大いに飲み食い歓談、四方山話に夜が更けていった。真尾さんから、今年のワンゲル部員数、夏合宿予定、OBによる支援などについて報告があった。来年の同期会幹事は、国岡さんにお願いすることになった。プロ写真家並みの腕前の手戸さんが集合写真を撮影。

翌7月11日8時半、宿の前で写真撮影後、貸し切りバスにて八幡平へ出発。頂上近くのレストハウスで一旦下車後、約一時間、頂上付近の散策。ハクサンチドリが咲き、ウグイスが盛んに囁いていた。わずかな雪を残した北東北の山の雰囲気を味わうことができた。再びバスに乗り、岩手山焼き走り溶岩流見学へ。「焼き走り」とは、1732年（享保16-17年）岩手山東側山腹に噴出したマグマが固まった地形。長さ3.4km、最大幅1.1kmにわたって真っ黒な大小の塊りがゴロゴロしている。草木もごくわずかしか生えていない。奥に宮沢賢治の詩碑「鎔岩流」のある展望台があるが、今回は時間がな

く行けなかった。昼食は小岩井農場での野外BBQ。BBQに皆テンションが上がってしまい、肉やビール・ワインのお代わり続出。その後、約30分バスに乗り盛岡へ。まず、「先人記念館」へ。米内光正、新渡戸稻造、金田一京助をはじめとする盛岡出身の偉人たちの足跡を見学。つぎに、江戸時代南部藩の歴史を展示している「盛岡歴史文化館」へ。学芸員やボランティアによる興味深い解説に感謝。最後に、駅前居酒屋で盛岡二次会をし、同期会のすべての行事を終了した。翌日ゴルフ予定の5人は電車で安比へ向かったが、残念ながら翌日は雨。しかし、雨の中ながら健闘したこと。

来年は福島に集まる予定。今年参加できなかった仲間たちとも来年は会えますように。



松川温泉にて（撮影：手戸）

8・9期定例山行 第20回 鬼面山（吾妻小舎 泊）

8期（昭和44年卒） 三日月道夫

2019年9月29日（日）、30日（月）（参加者 12名）

8期）前田ご夫婦、相原さん、中里さん、守護さん、根岸さん、三日月

9期）富川さん奥様、石野さん、原田さん、伊藤健一／千代子ご夫婦

今年は 8・9期定例山行も節目の20回、更に8期のメンバーは卒業50周年の記念すべき年となり、ここまで継続されてきました。皆勤賞は、前田さん、伊藤ご夫妻です。吾妻小屋泊りは2001年以来3度目、9年ぶりになり、今回は紅葉を楽しめる時期を従来から遅くしての計画となりました。

初日午後、三々五々に 吾妻小舎に集結し、全員揃ったところで、小雨模様の中ですが浄土平湿原の紅葉を求めて散策。浄土平湿原からシラタマノキの道を進むと、周辺はカラフルになり。シャクナゲの緑の中に、ミネカエデやダケカンバの黄色。ナナカマドやオオカメノキの赤の競演が、実に豪華な蓬萊山の斜面です。嬉しい紅葉ゾーンは 曇り空の紅葉も趣深いものです。夕食前には、早速懇親会の始まりです。

管理人さんは変わられたようですが、いつもながらの美味しい夕食を頂き、その後は 2階に場所を移して盛大な二次会に突入。旧友と過ごす楽しい夜が消灯時間まで続きます。

消灯後のランプの温もりが昔の記憶を思い出させた夜でした。

翌朝は皆さんのがけよく「快晴」です。小屋を囲む樹林の間から真っ赤な太陽が昇りました。早々に朝食をすませて、浄土平へ 雲一つない青空の下、一切経山が眩しく輝いています。ここで用意したヘルメット着用しての集合写真です。（作業員とまちがわれそうな人も？）

スカイライン経由 登山口の野地温泉へ。途中 会津の名峰磐梯山が 雲海上に見えます。前日に、相原さんがガスの中偵察していただいた鬼面山へのコースを。心地よい風、景色の中

山頂を目指します。土湯峠までのブナ林、そこからの色好き始めた低木箇所を年齢による体力の衰えの懸念もなく快調に約300mの標高差を登り、1480mの山頂に到着です。

山頂からは 西吾妻、磐梯山、飯豊連峰、蔵王連峰など 懐かしい山々を望んで大満足！箕輪山方面の紅葉を楽しんで下山、土湯峠で早めの昼食（吾妻小舎のおにぎり弁当）をとり最後は 野地温泉の白濁の湯で疲れをとり、次回の再会を楽しみに散会しました。



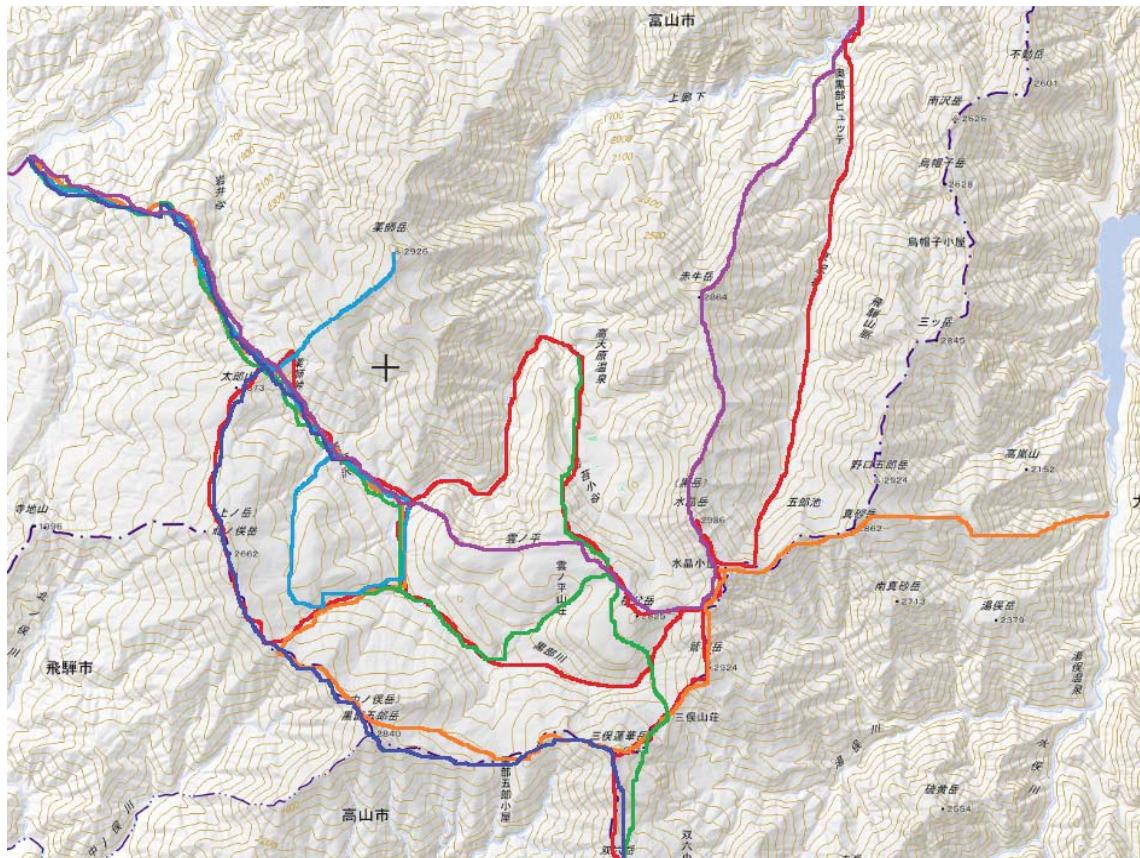
黒部源流読壳新道縱走

22期（昭和58年卒）石川 勤

期間 8月10日～8月13日（8月9日富山泊）

メンバー 21期：千田、富士原、22期：手塚、石川、ゲスト：久保田（東京農工大OG）

今回の縦走メンバーのうち千田、手塚、石川の3名は1980年夏合宿黒部パーティーのメンバーです。当時の夏合宿では黒部源流の沢歩きを主体に13日間のコースでしたが、このエリアを行きつくすることは出来ず2000年を過ぎてから何度も再訪してきました。これまでのコースを地図に記入すると以下のようになります。



赤:1980年夏合宿 黒四ダム→東沢→水晶岳往復→雲ノ平→高天原→立石→奥の廊下→赤木沢→薬師沢道→黒部源流→鷲羽岳→双六岳→新穂高温泉

橙：2004年 折立→薬師沢道→赤木沢→黒部五郎岳→真砂岳→湯俣

緑：2008年 折立→薬師沢道→赤木沢大滝往復→祖父沢→雲ノ平→高天原往復→双六岳

水：2011年 折立→薬師沢道→赤木沢→薬師沢左股下降→薬師岳往復→折立

青：2018年 折立→薬師沢ピストン→黒部五郎岳→双六岳→新穂高温泉

紫：2019年 折立→薬師沢道→雲ノ平→水晶岳→赤牛岳→黒四ダム

毎回薬師沢を通っていますが、ここ(右俣左俣出合付近)ではイワナ釣りをしています。2008年には20匹以上釣れたのですが今年の釣果は6匹でした。

寄る年波に勝てずこの数年重い荷物を持っての沢歩きが難しくなり、今年のコースは行きそびれいた水晶岳から赤牛岳を縦走するコース(読売新道)にしました。この尾根は東沢と黒部源流の分水嶺であり、高天原を深い山に囲まれた地にするために欠かせない存在です。ここから流れ出す温泉沢は黒部最奥地の高天原に温泉を提供しています。眺めてビールを飲み、風呂に入るだけなく是非とも歩かねと何年も前から考えていました。



このコースは全て道歩きで危険なところも無く中高年登山向きですが、唯一の問題が3日の行動時間が長いことです。水晶小屋にテントサイトがないため、雲ノ平のテンバから奥黒部ヒュッテまで1日で行かなければなりません。

2004年の山行で2日連続14時間行動になって体調を崩した苦い思い出があり、行動時間が長過ぎるとメンバーの合意が得られません。なんとしても計画上のコースタイムを短くする必要があります。そこで一計を案じ企画を通すために昭和52年版の『アルパインガイド』に登場してもらうことにしました。昔のガイドのコースタイムは最新版より短いためです。これによれば雲ノ平から水晶岳までが3時間5分、水晶岳から赤牛岳までが2時間15分、赤牛岳から奥黒部ヒュッテまでが3時間25分と合計9時間以内に收まります。最新版の『山と高原地図』では行動時間が12時間になっていましたが、このことに他のメンバーが気づき騒ぎ出したのは山に入ってからのことでした。私は「不都合な真実を隠していたな」とメンバーから非難されもしましたが後の祭りです。

さて、実際に歩いてみると雲ノ平を4時半に出発して赤牛岳に着いたのが12時頃、奥黒部ヒュッテ着が17時前なので休憩時間を引くと10時間で歩けていました。経験的に現在の我々の実力は、登りはほぼ最新ガイドブックのコースタイムとおり、下りになるとそれよりかなり速いのです。今回のコースは赤牛岳から先はひたすら下りなので、ここで登りでの遅れを取り戻せたのでしょう。平地はどうかというと黒部ダムから奥黒部ヒュッテの間を1980年は重い荷物を持って4時間半で歩いていますが、今回は同じルートの逆コースを6時間弱かかっているのでずいぶん力が落ちていることがわかります。

さて、この39年の風貌の変化はというと左が昭和の学生、右が令和の中高年です。

一人だけ太って髭が生えています。



コースタイム談議でページを費やしていましたが、読売新道自体の赤牛岳以降の整備が他の登山道に比べ十分とは言えず歩き辛い道でした。ただ、この長大な登山道を登る登山者も何人かいたのには驚きました。奥黒部ヒュッテを早朝に出発し水晶岳の手前でビバークすると話してくれた人もいました。

今回の山行は4日間ずっと晴天で素晴らしい景色を堪能することが出来ました。黒部を一度も雨具を着ずに歩けたのは今回が初めてでした。今年でしばらく黒部はやめようかという話が出ていたのですが、山はまた来いと言っているかのようでした。

なお、それなりのダメージがあったようで、千田は下山から2日後に虫垂炎を発病し入院していました。



写真は水晶岳をバックに赤牛岳への登り。水晶岳の右に笠ヶ岳、左に槍ヶ岳が見える。千田撮影
赤牛岳は真夏の北アルプスにしては人が少なく静かな山行が楽しめました。

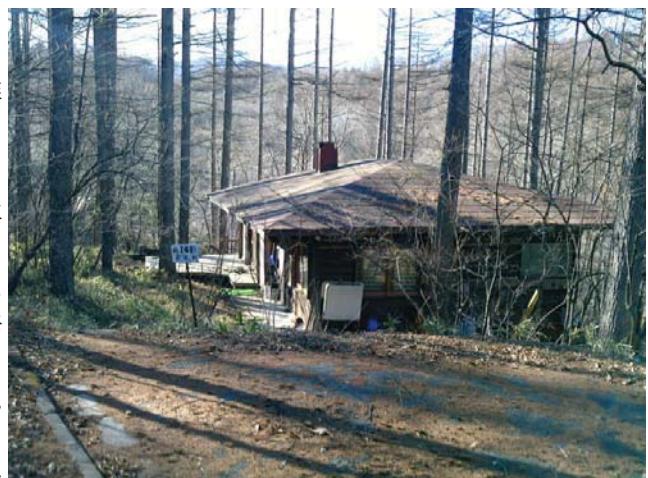
高齢者の令和元年

3期（昭和39年卒）後藤 龍男

年を越すと80歳です。いささか歳をとりました。東京での夜の酒宴に、電車に乗って上京するのがいささか億劫になり、新橋亭のO B会もしばらくご無沙汰しています。最近は足腰が衰え、山からも遠ざかりました。もっぱら温泉とせいぜいがハイキングです。仙台二高出身者の「昔の仲間会」と言うのがあり、そこへ潜り込んで一緒にあちこち出かけます。小生千葉一高出身で仙台二高とはまったく関係ないのですが、この歳になればそういうことは問題ではない。ただただ親しい仲間と仲良く温泉を楽しめばそれでいい。

今年は西会津の柳津温泉、二本松の岳温泉、奥日光の湯元温泉、那須湯元の温泉に行きました。岳温泉では安達太良山、那須では茶臼岳に登りました。両方とも登りはロープウェイを使いました。安達太良頂上からの下りで、足がよろめいてうまく歩けず、麓の駐車場にたどり着いたときは疲労困憊の体でした。数年前は軽々と歩いたものですが、歳はとりたくないものです。足腰と言うより、体のバランス感覚が衰えているようです。先日テレビで奥穂高の頂上からジャンダルムに至る稜線歩きをやっていました。ナイフリッジや垂直の岩壁がいかにも大変そうで、こんなところはとても歩けないと感じましたが、思い起こせば60年前の大学2年生の時、小俣、遠山、1年先輩の2期の渡辺さんと4人で北アルプス縦走をやったときは、切り立ったナイフリッジをまるで銀座通りを散歩するように、スタスタ歩いたのを思い出しました。つくづく歳はとりたくないものです。

昭和47年に、3期、4期、5期の10人で北八ヶ岳山中に山小屋を作りました。二口峠の伝蔵荘の名を借りて「伝蔵荘」と命名しました。以来50年、伝蔵荘生活を楽しんで来ましたが、みな歳をとり、物故者もすでに3人、病気や怪我で小屋の維持管理が次第にしんどくなっていました。春の例会には5人しか集まりませんでした。いろいろ相談して、体が動くうちに小屋を取り壊して土地を佐久穂町に返すか、貰ってくれそうな人を探そうと言うことになりました。幸いなことにぜひ欲しいという人が現れ、とんとん拍子に話が進んだのですが、そうなると未練が出てきて反対論が続出、せっかくの嫁入り話がおじやんになってしまいました。でも歳を考えればこの先小屋の維持管理は難しい。気持ちだけではど



うにもなりません。

TUWVOB会の中に、どなたかお仲間を誘って貰い受けてくれる人はいませんでしょうか。譲渡先がTUWVのお仲間であれば、未練も吹っ切れることでしょう。もちろん無償譲渡です。50年慈しんできた可愛い娘なので、幾ばくかの持参金を付けることも考えています。譲渡手続きは簡単で、町役場に書類を出すだけ。場所は中部横断自動車道の八千穂高原インターから車で10分、標高1300mの唐松林の中です。すぐ下にはゴルフ場もあります。新橋亭の酒の肴にでもして頂いて、皆さんでご相談、ご検討頂ければ幸いです。

天山山脈

4期（昭和40年卒）小原 佑一

シルクロードの行く手を遮るように邪魔をして天山北路と天山南路に分けてしまった天山山脈。

私が天山山脈を気にするようになったのは現役時代にスウェーデン生まれの探検家 スヴェン・ヘディンの「彷徨える湖」を読んでからです。中央アジアのロブノール、タクラマカン、楼蘭、敦煌……ズーッと憧れでした。しかしロブノールが中国の核実験場となり一般の外国人が現地に立ち入ることは困難になってしまいました。

私が実際に中央アジアの地に入って天山山脈などを見たのは今から12年前、敦煌からゴビ（荒地）の悪路を西に向かってロブノールの方に入った雅丹地質公園（ヤルダン地質公園）の魔鬼城を訪れた時です。

それから6年たって、タ克拉マカン砂漠の南側を通る玄奘三蔵がインドからの帰路に法典を携えて通った西域南路の米蘭遺跡を訪れ、ホータンから新砂漠公路で砂漠を横断しクチャに出て塩水渓谷などを訪れて天山山脈の南側の麓を覗いてきました。

玄奘三蔵の往路はクチャ、塩水渓谷を通って現在の中国側の天山南路からペデル峠で天山山脈を越え現在のキルギス（旧ソ連邦の一部）のイシククル湖の南岸に出て、アクベシ（碎葉城）を通過してサマルカンドの方に行ってから南下してインドに向かった。

今回、私はキルギスの首都ビシュケクからアクベシを通ってイシククル湖の北岸へ。

イシククル湖は周囲約700km琵琶湖の約9倍の広さを持ち一番深いところで水深約670m、海拔1606mの高地にある、塩分0.6%の湖です。旧ソ連邦時代、湖の北岸は政府／共産党の要人の保養地、南岸には軍の秘密訓練地があったので外国人の立ち入りは厳しく禁止されていたそうです。現在はリゾート地としての開発が行なわれ、多くの外国人観光客（私もその一員）の姿も見られるが自然環境の維持については厳しくコントロールされている。湖水には有機物が少ないため水は澄んでおり、生息する魚類も少なく、藻や水鳥の姿も見かけなかった。水泳は禁止されていなかつたので泳いだところ「ここで泳いだ日本人を初めて見た！」と言われてしまった。

イシククル湖の東端にはロシアの探検家ブリジヴァリスキーの墓と博物館がありました。ブリジヴァリスキーはヘディン、スタイン、大谷探検隊などと同じ時代に中央アジアを探検したが最初は海の方（日本海のシベリア側）の調査をしていたらしい。その後、内陸に入り中央アジアの探検、最後はイシククル湖周辺が気に入って居を構えてしまつたらしい。彼の収集品が博物館に展示してあったが、他の中央アジアの探検家と違って人、歴史、文化などの資料はほとんどなく動植物の標本がメインであった。植物の押し葉や色あせた剥製が雑然と展示してあるだけで旧ソ連邦時代のロシア帝国関連に対する保管維持管理ってこんなだったのかなあー！と思ってしまいました。

天山山脈への入山の拠点となるカラコルから山に向かって道路は谷に入る。バスは入れないので途中で小型のマイクロバスに乗り換えてジュディオグズ渓谷の高原へ。

高山植物が花をつけている。しかし家畜が放牧されているので斜面一面に花が咲き乱れているという状態ではないがそこかしこに可憐な花が咲いている。

エーデルワイスの咲いている一角を見つけ、周囲に散在している乾燥した家畜の糞を気にしながら這い蹲って写真を撮ったり、寝転んで間近で眺めたりして楽しむ。

首都ビシュケクに隣接するアラアルチャ自然公園の入口ではユキヒョウ（雪豹）の像が迎えてくれる。ユキヒョウはマラヤ、カラコルム、天山山脈あたりの高地に生息していてめったに姿を見ない絶

滅危惧種らしい。数年前、NHK TVがユキヒヨウの生態を撮影した貴重な記録と称して特別番組で放送したことがあった。ブリジヴァリスキーの博物館にもいかにも時代物の剥製が置いてありました。帰国後甲府の動物園にユキヒヨウが飼育されているというので見に行ったら飼育ケージは空っぽ。係りの人に聞いたら一ヶ月前に死亡したと！このユキヒヨウは多摩動物園で2003年に生まれた雌で生後多摩、神戸、名古屋の動物園を巡って2017年に甲府の動物園に来たと空になったケージの前に書かれていた。

アラアルチャ自然公園で谷に沿った道を高山植物の花を観ながら歩いて行くと雪をいただいた天山山脈の山々が近くに見えました。静かな散策の道でした。



エーデルワイス ジュディオグズ渓谷



散策路から見た天山山脈 アラアルチャ自然公園

御嶽(御岳)山巡り

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

木曾の御嶽山に2010年に登頂して、何気なく「御嶽山」を検索していたら、標高的に一位に木曾の御嶽山3,067m、二位に秩父の御岳山1,081m、三位に武藏の御岳山929mとあったので、順番に巡つてみることにした。

秩父御岳山には2018年11月28日（水）に登った。前日の宿泊先の山梨県甲州市勝沼から車で雁坂トンネルを通って、秩父市道の駅大滝温泉には9時20分に到着した（快晴／寒6℃）。大滝温泉を9時30分に出発し、御嶽山の下社にお参りして、貯木場、杉ノ峠、838mピーク、送電線鉄塔下、剣ヶ峰、林道にクロス、鎖場、秩父御岳山山頂には12時20分に到着した。1,000mの低山ながら、快晴のおかげで、360度の展望であった。両神山、雲取山も良く見える。山頂は、凝灰質の灰色泥岩であった。記念写真を撮って12時35分に下山、山道を切り取る林道（少々遠回りでも歩きやすさと地質を見るため林道を下ることにする）、（途中に黒色泥岩や玄武岩と思われる火成岩が層をなしている）、右手に通行止めの林道のトンネル、貯木場、舗装道路、大滝温泉には15時00分に戻った（晴れ）。落石コース（所要時間1時間50分）が通行禁止だったので、杉ノ峠経由で強石コースを登ったが登りが2時間50分で、途中から車通行禁止の林道を下り、下りは所要時間は2時間25分であった。

武藏御岳山には2019年11月6日（水）に登った。鎌倉の自宅を車で出発し、青梅市滝本の駐車場には8時30分に到着した。紅葉にまだ早いためか駐車場はガラガラ。山支度を整えて、8時42分発の御岳登山ケーブルカーに乗車し（乗客16名／快晴）、御岳山山頂駅、御岳神社山門にて朝食、御岳山本堂を参拝し10時、七代の滝分岐、奥の院のトイレ、岩石園入り口、サルギ尾根、奥の院、大岳山には12時10分に到着した。山頂には10名ほどの登山者がいて、快晴で富士山が美しかった。登山道では、初めに粘板岩から砂岩が分布し（幅5mmの水晶脈片を見た）、サルギ尾根への登りで石灰岩、再び粘板岩の後に、その後チャートが混じり、奥の院手前あたりから变成緑色凝灰岩、山頂付近ではチャートに変わった。山頂の三角点は二等であった。12時30分に山頂を後にして、奥の院、岩石園入り口、御岳山山門、御岳山山頂駅には14時40分に到着した。登山は登りが約2時間50分、下りが訳2時間10分で

あった。「みたけ山のガイドブック」では登りが2時間30分になっているので、年齢を考えれば“まあいいかな”であった。



秩父御岳山



武藏御岳山の大岳山

近況報告

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

学生時代には考えられなかったことだが、10年ほど前ふとした切欠で男声合唱団に入団した。声の出し方から指導を受け、さぼらずに練習を続けるうちに合唱の魅力、ハモルことの楽しさに目覚め、現在は3つの合唱団に所属して、練習と演奏会に多くの時間を使っている。

2019年5月22日混声合唱団グランの一員として、第11回国際シニア合唱祭「ゴーランウェーブ in横浜」に参加した。横浜みなとみらい大ホールを会場にした大きな合唱祭である。ワンゲル同期の仲間に合唱祭のPRと終わった後の飲み会のお誘いをメールした。何と驚いたことに、多くの仲間が聴きに(?)飲みに集まってくれた。北海道から上田ご夫妻、酒田から大山ご夫妻、近郊から山口さん、菊谷さん、村山さん、石川さん、幹事を務めてくれた高橋直樹さん。

「また逢う日まで」と「戦争を知らない子どもたち」の2曲を歌い、盛大な拍手をいただいた。合唱終了後、直樹さんの案内で横浜中華街「青葉」へ行き会食をした。久しぶりに会う仲間と何度も杯を傾けた。私の歌をだしにして集まってくれた仲間に感謝の乾杯！ワンゲル7期の固い絆に乾杯！病気と闘っている仲間に乾杯！何ものにも変えがたい同期の仲間である。

会食中にメールが入った。「グラン金賞受賞！」金賞受賞でまたまた乾杯！



故 川田実君との山行

8期（昭和44年卒）前田 吉彦

山を歩いていると、昨春亡くなった川田君を思い出すことがある。特に一人でとぼとぼ歩いている時に。彼とは随分一緒に山に行ったものだ。彼が一年生の時の吾妻山秋合宿、二年生になってからは旧錬、残雪の鳥海山、夏合宿（南アルプス白根山脈縦走）、最後は秋の飯豊に二人で行った。数年前までは8・9期OB山行に参加してくれていた。

体力があり、中々弱音を吐かないタフガイ、そんな印象が強かったが、数年前のOB山行で酔った勢いか「前田にしごかれた」と冗談半分で言うようになった。聞いてみると、「石野君と3人で行った鳥海山の時に初めてバテタ」と。確かに鳥海山の登りは長かった。朝6時吹浦の海岸を出発し、車道を延々と歩き、標高約1,100mの登山口からは雪上をひたすら登って、ようやく山頂に着いたのは夕方6時。一日の標高差2,236m。私にとつても一日の登り最高記録。確かに疲れたけれど、大きな充実感を味わった一日であった。

夏合宿ではエッセンを担当、いつも暖かい汁物を作り、とにかく皆の腹を一杯に満たしてくれた。口数は多くはないが、ムードメーカー。踏み跡が判然としない、ルート情報がほとんどなかった白根山脈の縦走でも、彼がいるだけでパーティーの雰囲気は、何となく明るくなつた。

卒業後大手土建会社に入り、三重県で勤務していたが退職、一念発起して、青森県十和田市に広大な農園を購入し、小松菜の専業農家になった。

「最近元気がない」という奥さんの知らせで、数年前彼の農園を訪問したことがある。原生林に囲まれた農園開墾時期は、自ら重機を操って行い、10棟ほど建てたビニールハウスは大型農機具が自由に動き回れるように自ら設計・製作したと。更に敷地内で温泉が湧き出したので、その熱を利用することで、普通は年間8~9回の小松菜収穫を、11回程度まで増やしていると説明してくれた。小さな小松菜の種を、一粒づつ均一に蒔くのは至難の業である。種蒔き農具を発明したなど成功した転業農家として、地元新聞にも大きく取り上げられたと誇らしげに語ってくれた。

彼が亡くなった後も、奥さんはじめ3人の子供家族が川田農園を引き継ぎ、幸せに暮らしている。川田一代で農園を始め、育てたのだ。立派なことだと思う。もう会うことは出来ないけれど、これからも一人で山に登つたら、若かりし頃の川田君、農園を起こした川田君を思い出すだろう。

(令和元年6月3日 赤城山にて)

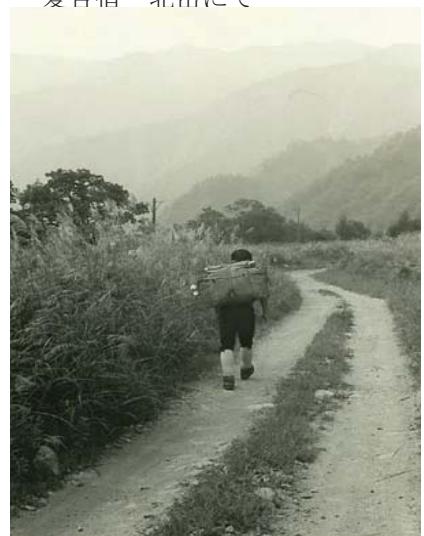
飯豊（先を行く川田君）



鳥海山にて



夏合宿・北岳にて



くろがね小屋に泊まる

8期（昭和44年卒）相原 敬

あれが阿多多羅山 あの光るのが阿武隈川
智恵子抄の「樹下の二人」でも知られる安達太良山は、見所が多くバラエティーに富んだ山として人気が高い。深田百名山であると共に、田中澄江氏の花の百名山としても知られる。

もちろん現役時代に登頂しているが、卒業後もOB山行の2回を含めて5回ほど登った。中でも心に深く刻まれたのは、TUWV卒業30周年と銘打って行われた同期の最初のOB山行だった。あれから21年…できれば彩やかな紅葉を見たかったが、混雑を嫌って今年6月の梅雨の晴れ間に登る機会を得た。

何故今かと言えば、築55年の老朽化したくろがね小屋の建替え工事が来春にも始まるらしいので、思い出の詰まった小屋にもう一度泊まりたかったからである。更に、小屋泊まりであれば懇意の山友夫妻（♂横須賀♀秋田出身）でも歩けそうなので、2夫婦4人の病院通い薬漬けヨレヨレ隊の安達太良遠征と相成った次第である。

RWで薬師岳に上がり、ほんとうの空の下で安達太良山を見上げてから登りにかかる。我々のペースは、休憩込みで標準コースタイム×2という気楽なものだ。山頂でランチタイムを楽しみ牛の背から荒涼たる沼の平を見下ろせば、今更ながらその迫力に圧倒される。その後チンタラ矢筈森まで足を伸ばし、峰の辻経由で小屋に下った。



小屋の佇まいに全く変りはなかったが、橋本親父さんが若い管理人に代わっていて、ハーモニカ演奏で合唱などという古き良き時代は望むべくもない。夜空に瞬く無数の星は昔の感動そのままで、屋外で冷えた身体を白濁温泉で暖めてまた外への繰り返し。

翌日は勢至平のレンゲツツジ群生地に遊び、奥岳近くの渓谷遊歩道を探索して帰着した。同行した二人は初めての安達太良山だったので、とても楽しそうに頑張って歩いた。80歳近い高齢にも拘らず山への意欲を失わない姿勢には、常に感銘と影響を受けている。



「アルペ・アドリア・トレイル」紀行

8期（昭和44年卒）三日月 道夫

オーストリア最高峰グロースグロックナーから、スロヴェニアを経て、イタリアのアドリア海へと至る、全長750kmのロングトレイルが「アルペ・アドリア・トレイル」で、オーストリアの高峰群、スロヴェニアのユリアン・アルプスの迫力ある岩峰と渓谷、イタリアのアドリア海と、国ごとに特徴ある風景を楽しみながら歩くことができるコースですが、今回はその中で特徴のある何ヶ所の山々を歩いてきました。

*イタリアのベネチアから入り スロヴェニア、オーストリアの山麓を移動して オーストリアのミルシュタット湖へ、裏山へハイキングし展望を楽しみました。



むことが出来ます。南側にはイタリア、スロヴェニアの険しい岩山、東側にはフィラッハの街や湖水群を一望することができました。

*オーストリア最高峰グロースグロックナー(3,798m)展望台へ。幸い、雲間から山々も姿を見せてくれました。展望台で山頂を展望し、聖なる血の伝説が残るハイリゲンブルートの村までを歩き、厳かな雰囲気の教会でお祈りしました。

*オーストリア南部ケルンテン州第二の都市フィラッハに連泊で滞在しながら地元で人気のドブラッチュ山(2,166m)の登山を楽しみました。木々の隙間からアルプスらしい岩山がのぞき、周囲をぐるりと見渡す好展望を楽し



*オーストリアから国境を越えてスロヴェニアへ つづら折りの道をヴァルシチ峠(約1,620m)へ。紅葉を楽しみながら やや急な斜面、展望のよいゆるやかな草原帯を登り、好展望の台地スレメ(1,900m)へ。ヤロヴェツ(2,645m)など360度のスロヴェニアの名峰を展望できました。

*スロヴェニアからイタリアに入り、横方向に重なる地層が見事なチマ・ディ・テラロッサ(2,420m)山頂を目指します。標高差約900mを登りきり山頂にいる間には運よく晴れて、素晴らしい山岳風景を楽しむことが出来ました。最後はアドリア海を望むイタリアの街トリエステ近郊でのハイキングをして終えました。

(10月1日～10日)



ただ一つ --- 日本の岩壁、日本の氷瀑、世界の岩壁

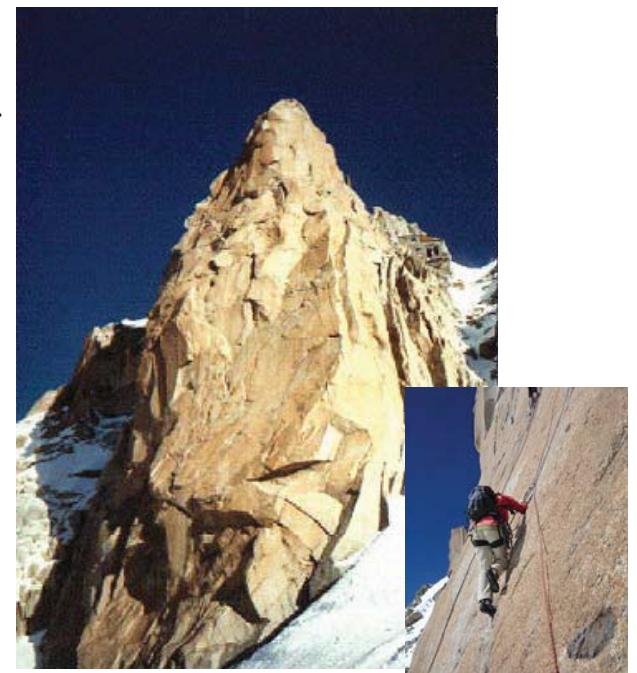
8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

クライミングを始めてからこの3月でちょうど20年になる。最初の10年はほとんど夫婦二人でのクライミングであり、今でもベストのザイルパートナーであった。心臓病が悪化して家内が登れなくなった後半の10年も何人かのパートナーに恵まれ、最近は20代から60代までの10数人のメンバーに教えながら登っている。

二人で登った数多くの岩壁や氷瀑から「ただ一つ」を選んで振り返ってみたい。日本の岩壁の「ただ一つ」は黒部の巨人「丸山東壁」である。内臓助平沢に面したこの大岩壁は訪れる人もほとんどいなく、アプローチや取付きも判然としない。そんな岩壁に二人だけで挑戦した。目指すルートは、左岩稜ルートと岩壁の真ん中をひたすら人工登攀する緑ルートの2本である。左岩稜の取付きはブッシュ帯の中であり、見つけるのが難しい。対面の斜面に登って見当をつけてから、急な草付きをトラバースして取り付いた。クライミングもさることながら、一発で取付きを見つけたことが忘れられない。

日本の氷瀑の「ただ一つ」は八ヶ岳の「大同心大滝」である。八ヶ岳を代表する名瀑であり、アイスクライミングを始めて2シーズン目の目標に定めていた。正月休みに赤岳鉱泉をベースにアイスクライミングの特訓をした後、裏同心ルンゼを詰めることにした。しかし、この年は雪が深く、小さな滝の連続の裏同心ルンゼは雪に埋もれていた。仕方なく予定を変更し、大同心大滝を見に行くことにした。深い雪をラッセルしながらたどり着いた大同心大滝は目を見張るほどの迫力であった。裏同心ルンゼの予定だったのでスクリューは3本しか持ってこなかつたのが悔やまれた。しかし、不思議と登れるような気がしてしまい、吸い込まれるように登り始めた。無事に完登できたからよかつたものの、その後はとてもスクリュー3本では登れる気がしなかつた。

海外では、オーストラリア・ブルーマウテン、フランス・シャモニー、イタリア・ドロミテ、スペイン・エルチョロなど登ったが、「ただ一つ」は、エギュー・ド・ミディ南壁のレビュファルートである。伝説のクライマーであるガストン・レビュファが開いたルートであり、写真のスペリ台のような綺麗なフェースのクラックを拾いながら左上していく素晴らしいルートである。うっすらと赤みがかった岩でとても美しい。



エジプト、沖縄、南米旅行

10期（昭和46年卒）田中 康則

今年の登山は、3月に2回高尾山に登山したのみ。正月にはエジプト旅行。ルクソールからアスワンへのナイル川クルーズ。アブシンベル神殿へ。カイロへ戻りピラミッドなどを観光して帰国。



アブシンベル神殿にて



ピラミッドとスフィンクス

5月は3泊4日で沖縄へ。首里城などを観光。

7月27日（土）は品川のホテルで恒例の10期同窓会。



沖縄旅行 首里城



7月のビールを飲む会

8月は3回目の南米旅行。成田からロサンゼルスへ。更にリマ、イグアスへ。イグアスの滝を見学。リマへ。地上絵遊覧飛行。そしてクスコからマチュピチュへ。インカ道の散策など。2泊後クスコへ。市内観光後、空路リマへ。ロサンゼルス観光後成田に戻りました。

今年の1年も旅行で盛り上りました。



イグアスの滝（アルゼンチン側）



マチュピチュにて

雪深い津軽での生活が始まりました

22期（昭和58年卒）利根川 敏

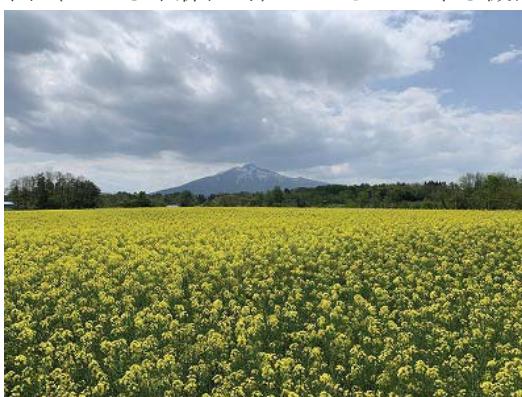
今年は、勤務先や生活拠点が大きく変わりましたので、近況報告をいたします。

昭和34年生まれの私は平成最後の4月に60歳の定年退職をむかえました。令和元年5月には八ヶ岳のふもと茅野市に本社がある法人に新入社員として採用され、4日間の研修後、岩木山（青森県）のふもとつがる市にある法人に出向、現在は自動車部品（S i ゴム製品）の製造会社で、70名ほどの社員と一緒にもの作りをしています。

つがる市は梅雨がほとんど無く、夏もエアコンが必要になるのは1か月ほどです。お米や野菜をはじめ夏はメロンやとうもろこしが大変美味しく、日本海に面した鰺ヶ沢まで行くと新鮮な魚介類が手に入ります。また、相撲が大変盛んな地域で、会社はちびっこ相撲のスポンサーになっており、地方巡業で津軽に出向いた横綱の取り組みを目の前で観戦する機会もありました。通勤時間も車で5分、東京の生活に比べ自由時間も長く、定年後のスローライフを過ごすには大変恵まれた環境です。

ただし、この快適な生活も11月までで、いよいよ12月からりんごの花が咲く5月初旬までは、雪と地吹雪に悩まされると思います。（冬の津軽は未体験のため、どんな事になるのやら...）つがる市での生活はまだ7ヶ月ですが、こちらで撮った四季の写真を4点掲載します。

住まいは新青森または青森空港から車で1時間、太宰治や立佞武多（たちねぶた）で有名な五所川原までは20分、桜が有名な弘前城へも50分、JR五能線の陸奥森田駅から徒歩10分ほどです。津軽方面（つがる市森田町）にいらっしゃる機会がありましたら、ぜひご一報下さい。



春：岩木山と菜の花畑



夏：ちびっ子相撲大会



秋：リンゴの季節



冬：雪の季節到来

故 近田和人くんを偲んで

11期（昭和47年卒）同期より

令和元年7月25日、11期の近田和人くんが旅立ちました。すい臓がんでした。「早期発見で、ラッキーだった」と言って術後回復、2019年の年賀状には「春には、大好きなゴルフと海釣りができそうだ」と書いてあったのに。

近田くんは、ワイルドが似合う輩でした。

3年生の時の「南アルプス」夏合宿で、リーダー近田が選んだのは、主流の赤石山脈ではなく、藪漕ぎの白根山脈でした。タフガイの近田くんらしい選択でした。

一方で、ダンディでした。千葉県「安房で生まれた田舎者」と自分では言っていましたが、仙台で見せた身のこなしは、都会のセンスを感じさせるCity Boyでした。

「ワイルド」と「ダンディ」は、大学卒業後の会社人生でフルに發揮され、佐藤工業で、大活躍しました。最後は、役員になり、会社の経営を担いました。

佐藤工業を卒業した近田くんは、2014年秋、11期同期を仙台に「集合」する機会を作ってくれました。泉ヶ岳温泉に、全員「集合」しました。

そこでは、11期各人の大学卒業後の人生が語られました。近田くんは、そこで「死に目に逢った」という話をしました。交通事故で、数日間、意識がなかったとのことでした。

死に目に逢い、一度死んだ人間は強くなります。死に対して強くなります。

しかしながら、病魔は残酷でした。その強さを許しませんでした。『ぜったいに帰ってくる』という叫びを残したまま、逝ってしまいました。

俺たちみんな、君を忘れない。



1970年の「旧練」終了後の写真

訃報

2018年 3月 24日、9期の川田実さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

訃報

2019年 7月 25日、11期の近田和人さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2020年1月31日(金) 18:00 (会費は8,000円の予定)

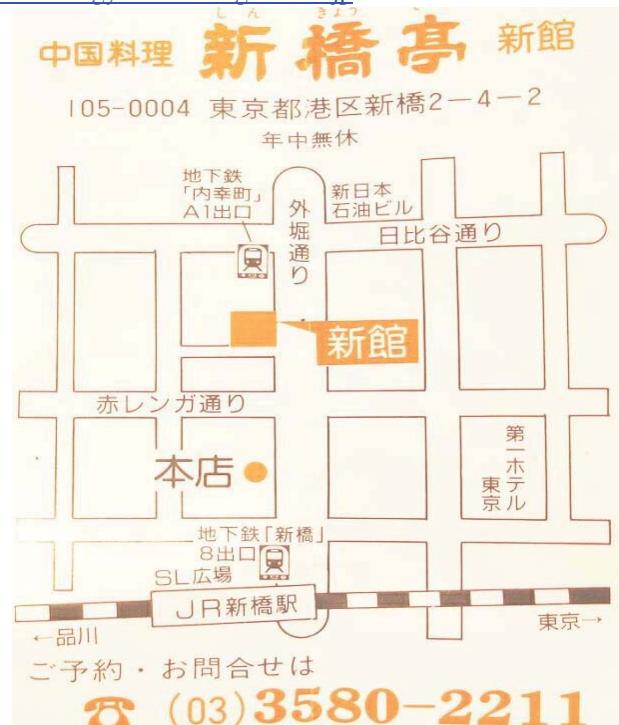
新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 TEL 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp

<2019年1月25日 新年会出席者>

(S39) 松木功 (S40) 小原佑一、島崎質
(S41) 門屋大二、櫻洋一郎、佐藤豊治、谷正美、
原田克介、八木真介、横松薰、横山雄一郎
(S42) 加藤邦明、青木祐二 (S43) 石川誠之、大木芳正、
大釜寛修、菊谷清、高橋直樹、藤森英和、真尾征夫、
(S44) 小笠原弘三、佐藤拓哉 (S45) 伊藤健一、原田博夫、
桃谷尚安 (S46) 田中康則 (S48) 神山文範
(S49) 岡部安水 (S50) 男沢弘、三木博明
(S62) 伊田浩之 (S62) 平塚晶人 (H6) 星征雄
以上 33名



TUWVOB会 2018年会計報告 (東京口座)

(1) 収 入	
前回から繰越	3 4 4, 7 3 6
60周年記念行事残金	1 1 1, 6 4 5
利息	2
計	4 5 6, 3 8 3
(2) 支 出	
50周年記念行事残金を60周年	
記念行事実行委員会へ	1 1 2, 0 0 0
講習会交通費 (2017年6月分)	2 4, 0 0 0
新年会ネームプレート、ペン	8, 1 1 5
次回繰越	3 1 2, 2 6 8
計	4 5 6, 3 8 3

「若い人の参加を促すために」、平成に卒業した方の会費の半額は新年会の残金から補助しています。残金が不足した場合は、OB会の会計から補助することとしています。ご理解のほどお願いします。

★★ 事務局より ★★

- ◇ OB会報50号をお届けします。今回多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を継けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワンゲルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は1ページ目のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。これまでメールアドレスが分からない方には郵送してきましたが、原則として郵送は終了しました。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622